京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十七卷　第四・五號

リカアドウの論理構造……行澤健三

ヨークシヤー・ラツダイトに就いて（二）……穗積文雄

嗜好の變化と價格の變動……市村眞一

森耕二郎教授著『社會政策要論』（新版）……岸本英太郎

河野健二著『絕對主義の構造』……後藤靖

昭和二十六年五月

リカアドウの論理構造

――自然秩序――

行澤健三

一　視點

筆者の思想史上の見解によれば、理論の抽象の次元は問題意識によつて決定されて居り、こゝに社會科學理論の二要件たる合理性と現實性との併有の鍵があり、從つて問題意識の內容の摘出がその理論の限界＝階級性を示すものである。概念體系は問題意識の基盤の上に有機的な連關＝生命を得、個々の概念の展開乃至批判は、問題意識を同じうするか、又は問題意識の批判の基盤の上で行われて始めて科學的たり得ると思われる。

私は本稿において、此の見解に基ずいて、リカアドウ理論を次の如く檢討したいと思う。――リカアドウは、經濟學に關する抽象理論をうちたてた人として、その合理性の面のみが注目され勝ちである。彼の勞働價値說は混亂を示した。だがその解決に、合理性のみを追求し、問題意識の面を忘れるとき、如何に非科學的なリカアドウ解釋が生ずるか。之を示す爲に、先ずアモンのリカアドウ解釋を述べ、合理性の面から今一つの見解を示し、

次にリカアドウの論理構造を抽象の次元と問題意識との兩面から明らかにし(その特質を自然秩序と呼ぶ)、これによつて導かれるリカアドウ理論の現實性の視角から、二つの方向の正當性を問題にしよう。

註　論題の性質からして引用が多いので、ここにリカアドウの著述に關しての使用文獻を示し、行論のうちには略記するに留める。尙引用文の傍點は剩餘價値學說史の場合を除き、すべて筆者によるものである。

The Principls of Political Economy and Taxation, ed. by Gonner.

Ricardo's Economic Essys. ed. by Gonner.

Letters of D. Ricard to Malthus. 1810—1832. ed. by Bonar.

Letters of D. Ricard to Ramsay Mc Culloch. 1816—1823. ed. by Hollawder.

譯本。「低い穀物價格の利潤に及ぼす影響」及び「農業保護論」——古典文庫、吉田秀夫。書簡集は岩波文庫、中野正。

二　リカアドウの價値論の變遷

リカアドウの「政治經濟學及び課稅の原理」の敍述は演繹的であり、勞働によつて自由に增加しうる財貨の價値を規整するものは投下勞働量であるとの命題から出發する。從つてリカアドウの理論經濟學體系の把握乃至批判は通常その價値論を先ず手懸りとして行われる。所が彼の價値論の敍述を辿る時、それは必ずしも一義的に明確ではない。しかしこの曖昧さは、リカアドウが現實を一面的に捉えず、現實の複雜さを反映し、その明確なる認識への努力の跡を示すと見られる限りは、彼は絕えず「理論經濟學の父」として顧り見られるのであろう。從つて私は先ず、彼の價値思想の發展を簡單に跡ずけて見よう。

ホランダーはリカアドウの價値論の發展を三つの時期に分つているが、[1] 私はこれに對し第一期の區劃に重要性を認めず、彼の價値論の發展を「原理」第一版刊行（一九一七年）を境として二つの時分期つ堀教授の見解[2]に從い之を辿ろうと思う。

註(1) Hollander, The Development of Ricardo's Theory of Value. Qual. Jnl. of Economics. Aug, 1904.

(2) 堀經夫「リカアドウの價値論及びその批判史」

(一) 第一期、リカアドウの價値論は、一八〇九年以來の「地金論爭」に負う所が少くないが、彼の「原理」の形成は殆ど「穀物關稅論爭」に負つている。此の論爭を通じてリカアドウは財貨の交換價値は地代・利潤・勞賃によつて構成されず、逆に財貨の價値が勞賃と利潤に分れ、土地の肥沃度に由來する一般利潤の超過分が地代であるとの意見を一貫したが、この分配論を價値論で裏ずける必要を意識したのである。[1] 就中、穀物の從つて勞賃の騰落が一般物價に影響せざること――ここから勞賃と利潤との對抗關係が導かれる――の證明が彼の價値論形成過程の中心問題であつた。

註(1) 此の點詳しくは、ホランダー前掲論文及び、堀經夫前掲書參照。

所が、「財貨は其の生產に費された勞働の多少に比例してその價値を增減する」なる命題が明確にのべられたのは、「原理」を最初とするのであり、それ以前には生產費、或は生產の難易なる言葉を主として使用して居り、又上述の穀價乃至勞賃と物價の關係についても一八一五年には未だ「勞賃の騰貴は諸財貨の價格を高める」[1]として居るのである。

一八一六年二月に彼はマルサスに宛てて、

私の困難は「私自身と同じ考えを辿るように吾々の古くからの主題を他の人々の心に示すことにあります。若しも私が相對價値又は交換價値の法則を明かに洞察することを妨げるような障碍に打ち克つことが出來るならば、私は半ば既に戰に勝つたものと云えるでしょう。」(Letters to Matthus. p. 111. 譯本、上、二〇九頁)

と述べ、又同年十月

「私は價値及び價格の問題によつて非常に妨げられて來ました。これらの點に關する私の以前の觀念が正しくなかつたからです。私の現在の見解も同樣に間違つているかもしれません。何故ならそれは私の豫め考えたあらゆる意見（分配論が—筆者）と一致しない結論に達するからです。私は唯私自身の滿足のためのみとしても、私が自分の學說に一貫した形を與えるまで考え續けましよう。」(Letters to Malthus. p. 120. 譯本、上、二二六頁)

と述べている。此の「一貫」した形は、翌年刊行の「原理」における勞働價値說となつて現われたのであるが、しからば如何なる困難に面していたのであろうか。

小泉信三氏は此の點に關し、財貨の交換價値が其生產に必要な勞働量によつて決定されるということは、リカアドウは、既に夙くから說いているとして、一八一五年の「低穀價論」から次の引用をされる。

「あらゆる財貨の交換價値は、その生產の困難が增加するにつれて騰貴する。かくてもし、穀物の生產において、より多くの勞働が必要であることからして新なる困難がおこり、他方、金・銀等の生產にはより多くの勞働が必要でないとするなら、穀物の交換價値はそれらのものに比して必然的に騰貴するであろう。反對により少い勞働をもつて同一の生產物をあたえるであろうところの、穀物の、またはその種類の如何を問わずその他の財貨の、生產における便益は、その交換價値を下落せしめるであろう」Essays. p. 233. 譯本、二八—二九頁)

小泉氏はしかる後、「低穀價論」と「原理」との差異は、「原理」第一章の後半において生產上費された勞働量

の増減以外賃銀の騰落も又貨物の交換價値に影響することを認めた點に求め、これがリカアドウの逢着した難問題である（小泉信三「アダムスミス、マルサス、リカアドウ」二二九―二三〇頁）とされる。だが私には「低穀價論」において既に投下勞働價値說が存したと見るのはやや早計と思われ、同書ではやはり生產の難易、生產費が交換價値の決定原因と見ていると解される。このことは小泉氏が引用されたパラグラフの註に「すべての財貨の價格は、資本の一般利潤を含めてのその生產費によつて終局的に左右せられ且常にそれに歸着せんとしているけれども……」（Essays. p. 234. 譯本三〇頁）とあるのを見ても明らかであろう。所で、前段に述べられた勞賃と價値の關係は第一版に從つて、より正確に述べるなら「勞賃の騰貴は相對價値に影響しない。但し固定資本の導入の場合には影響するが。或る種の生產に用いられる固定資本の分量及び耐久力に比例して、其の生產にかかる資本が使用される所のその財貨の相對價値は勞賃と反比例して變化し、勞賃が騰貴すればそれは下落する。從つて如何なる財貨と雖も單なる勞賃騰貴から、價格は騰貴しない。」となろうが、リカアドウはこの後半部、所謂「修正」を述べた後、「勞賃の騰貴が價格の下落と兩立し得ることを主張せる上記の論述は、新奇なる說であるの故を以て不利なる立場にある……」（Principles. 1°ed. p. 42）と述べている所から見てスミスが原始・未開の社會においてのみ全面的に認めた勞働價値法則を以後の社會においても見出さんとする所に「困難」があつたと見られ、その問題が、穀物論爭との關聯においては、勞賃の騰貴が、物價の下落はよいが、その騰貴を齎らさないことを示すべく要請されていたと見られる。

（二）第二期　「原理」の勞働價値說が實際の具體的問題とは無關係に理論として或は辯護され或は攻擊された時期である。先ず一八一八年にマカロックが概要次のような批判を行つた。卽ち、リカアドウは勞働價値の原則が、

耐久性の度合を異にする資本には當てはまらぬことを認めながら、そのような場合は例外的と見たのであるが、むしろかかる場合が普通である。從つて、資本が原料と賃銀との異れる割合からなる場合、賃銀率が偶々ある仕事では他よりも高い場合、資本の耐久性が異る場合、又その耐久性は等しいが賃銀の支出が異れる場合――これらの場合は何時も、生産物の價値はそれに使用される勞働の分量に比例しないであろう。

マルサスも又之と同樣の批判を行つたが、かかる批判との論爭のうちに、リカアドウは次第に勞働價値說の修正の場合を重視するに至り、「原理」二版（一八一九年）は第一版に比し勞働價値原則の修正を一つの論點として提出し、第三版（一八二一年）の序文には「困難なる價値の問題に關する卑見を前版におけるりよも一層充分に說明せんと試み、其爲に若干の增補を加えた」と述べている。そして第一章第四節は「諸財貨の生産に費された勞働量がそれらの交換價値を規制するなる原理は機械其他の固定耐久資本の使用によつて可成り修正される。」と題される。しかし乍ら、ここで修正を考察した後リカアドウは次の如く結んでいる……利潤の變動には限界があり、從つてかかる原因による相對價値の變動には限界がある。相對價値變動の今一つの原因卽ち生産に必要な勞働量の變動に基づくものが大きい、又、利潤率の變動は何年かのうちに起るものであるが、生産力の變動は日々生ずる。從つて今後時々は變動の此の原因に言及するが、大なる變動は生産力の變動に基ずくものとする（Principles, pp. 29—30）

吾々は此の修正の意味を如何に考うべきか。リカアドウ自身は之について一八二〇年九月マルサスへの手紙で言う、

「私は目下、私の本の第一章に眼を通しています。それが新しく版（第三版のこと）を重ねる前に、その中に若干の訂正を加えた

いと思つています。……存分の意見を述べるには、本の分量を不都合なほど大きくしなければならないことになり、しかも私の讀者の注意を絶えず〔本來の〕主題 the [proper] subject から逸らしていなければならないのです。私がともかくも自分を辯護するには、それを別箇の出版物でなすべきでしよう。」(Letters to Malthus. p.172. 譯本、下、九四—九五頁)

即ち、修正論は主題ではないこと、及び修正については「原理」第三版では充分に意をつくしていないことが知られる。此の主題の問題は、問題意識への視角に重要であるが、その前に今少し合理性の面からの追求を續けることにしよう。

三 「修正」とアモンのリカアドウ解釋

(一) リカアドウは今引用したマルサスへの手紙に少し先立つ一八二〇年六月、マカロックに宛てて「若しも私がもう一度私の著述の價値に關する章を書きかえるとすれば、私は財貨の相對價値は一つの原因ではなく二つの原因によつて、……規制されることを認めるでう」と述べているのである。此の意圖は先のマルサスへの手紙で見ると第三版では果されなかつたが、「他の一書」は遂に出なかつたのである。然して一八二二年の「農業保護論」では、價値論は論據として用いられず、勞賃の騰貴が一般物價を騰貴せしめざることの理由としては、「一國にあつてすべての財貨に影響する如く作用する如何なる原因も財貨の相對價値に影響しない」[3] (Essays. p.264. 譯本六五頁) なる漠然たる論證を行つているのである。

かくの如き事情は「原理」の編者ゴンナアをして「彼が主張せんと欲したことは諸財貨の生産に拂われる努力の量とそれら財貨の交換價値との間に不變の關係が存すること、換言すれば兩者が共に變化することであつた。」[1]

と評せしめ、又カール・ディールも「リカアドウが其の價値論で與えるものは、一個の勞働價値說ではなくて一個の生產費說である。[2]」とのべた。而してスチュアート・ミルの價値論は此の方向の貫徹であつた。

所で今、價値の規制者として、勞働量と回轉期間をあげ、加うにるリカアドウが考察から除いた稀少品をも採りあげるならば、これらの統一原理が更に求められるのは當然で者り、ここに再び需要供給說が出現する。リカアドウの「修正」の意味をかく解するとき、リカアドウの經濟理論は如何に把握されるか。吾々はこれを「理論經濟學の建設者としてのリカアドウ」[3]の著者アモンの見解に代表せしめよう。

註(1) Ricard, Principles. p.XLI.

(2) K. Dichl, Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricards Grundgesetzen der Volkswirtschaft u. Besteuerung. 1905, I Teil. S. 44.

(3) Alfred Amonn, Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, Eine Einführung in sein Hauptwerk u. gleich in die Grundprobleme der Nationalökonomischen Theorie. 1924.

譯本、阿部勇、高橋正雄共譯「リカアドウ」

(二) アモンは此の書に於て「リカアドウの思想を理解し且つ發展せしめること」(Amonn, ebenda. Vorwort.S.IV.)を試み、交換價値の新原則を示さんとしている。その際彼の基本的な見解は次の如きものである。——交換價値又は廣義の「價格」は、狹義の「價格」卽ち「商品價格」であるか、或は「勞賃」又は「利潤」並びに地代であり、かかる種々な形態及び種類に於ける交換價値構成の法則を發見し乃至は敍述することこそ理論經濟學の本質的な對象である。かくしてリカアドウも亦その研究の冒頭に、そして同時にその研究の中心に、「價値」論卽ち

交換價値の基本法則を揭げているのである。而してスミスの「國富論」は富の建設促進の教えであり、リカアドウの「原理」は交換價値構成の學である――と。

周知の如くリカアドウは交換價値の源泉を稀少性とその獲得に必要な勞働量とに分ち、大部分の財貨は勞働の投下によつて無制限に增大し得ることが可能であり、そのような財貨の交換價値は投下勞働量によつて規整されるとの區分から出發する。アモンの批判は從つて、先ず、市場に齎らされる商品の大群は、成程勞働によつて增加し得るが、決して「無制限」にではなく、幾重もの極めて窮屈な、著しい制限の下に增加し得られるのであるとし、リカアドウに於ける「稀少性」の作用の輕視を衝くのである。

次いで、リカアドウに見られる所謂勞働價値說の「修正」卽ち夫々の財貨の生產に用いられる固定資本と流動資本との構成比率の差異及び固定資本の耐久度の差異がある場合、勞賃の騰貴はそれら財貨の交換價値を變ぜしめる、なる命題が俎上にあげられる。卽ち、アモンは『『勞賃の騰貴は、異なる事情の下に生產された財貨の間においては不平等に作用せざるを得ない。』と云う命題は勞働價値說の見地より見れば斷然誤りである」(Amonn, と評すると共に、此の修正がリカアドウにあつては、一般的利潤率の導入によつて說明されている點を採り上げ、リカアドウでは勞働價値說の樹立の後にその價値の分割部分として說明される利潤が、旣に何等の說明もなくして財貨の價値に影響するとされていることは一種の論點竊取であるとしている。

次いでアモンは、リカアドウ「原理」の敍述に從い「地代」について沃度のより劣れる土地が耕作されなくとも地代は存在し、第二次の沃度の土地が耕作されるに至るという事實、は單なる隨伴・繼起現象であるとした後、「市場價格と自然價格」次いで「自然勞賃と市場勞賃」について批判する。卽ちアモンは云う――リカアドウは

市場價格と自然價格とを區別し、前者は需給に、後者は投下勞働量に依存するとしたが、兩者は同一種類の價格であり、同一の決定原因に從う。供給と需要の關係こそ常に價格の高さの直接の決定原因であり、すべてのより遠き一時的且つ繼續的原因は供給と需要との關係を通してのみ作用する。市場價格と自然價格の不鮮明な且つ是認し得ない區別づけこそが、終にリカァドウをして市場價格決定の原因卽ち「供給と需要との關係」をより精密に研究することを怠らしめたのである――と。從つて又――自然勞賃とは、市場に於ける均衡の場合に成立する勞賃の高さ以外の何物をも意味せず、又現實勞賃が自然勞賃以上に繼續的に騰貴していることが「自然勞賃」の騰貴の前提であり、かくて市場勞賃が自然勞賃を引きつけるのである。のみならず、自然勞賃を構成する生活資料の量に「習慣」なる異質の要素の導入は、彼の價値體系の固定點を崩壞せしめる――。

かくてアモンの批判の結論は次の如くである。勞働價値原則は全面的に維持し得ない。交換價値と投下勞働量とが一致するのは財貨の生產に（生ける）勞働のみが、しかも同質の勞働のみが必要であるという現實には求め得ない場合のみであろう。リカァドウは假設を公理として出發したのであり、若しも逆に、勞働價値說を一の說明さるべき假設として提出したならば、恐らく他の原則――彼によつて非常に屢々示され乍ら、重要視されなかつたもの――を以て、交換價値理解の建設を試みたであろう。然る時は、恐らく吾々は、既に當時において、今日吾々が立つている點に立つていたであろう、或は全くそれを超えていたであろう。

(三)　かくてアモンは「リカァドウ理論の改築、交換價値說明の新原則」（アモン十八章の表題）を探求する。曰く、「吾々の科學が維持し得られる建物を建設するために用いる本質的なものはすべて、既に彼の『原理』の中に含まれている。そしてそれを直接に新築のために使用さるべく用意されているものとして見出すためには、ただ

それを全體系から分離又は離奪すればよいのである」(Ebenda, S. 100. 譯本、一三一—一三二頁) 今本題からややそれるがこの「新原則」について簡單に紹介しよう。

財貨の價値の源泉は財貨の「相對的稀少性」(relative Seltenheit) であり、これは二つの普遍的條件、卽ち、主觀的要素たる欲望と客觀的要素たる客觀的稀少性とに依存し、財貨の需要に於て表現される。所で大部分の財貨の自然的な客觀的稀少性は、勞働によつて、人爲的に變化せしめられ、減少せしめられる。しかし勞働が稀少であるから、それが完全に止揚されることは出來ない。かくてかような財貨の稀少性關係は勞働の稀少性關係に依存すると共に、勞働自身が價値を得るに至る。又利潤の支拂は、現在なされる勞働に對する過去勞働のより有利な相對的稀少性關係の中にのみその原因を有し、土地の相對的稀少性は土地の價値、地代を生ずる。

かくしてアモンは「すべての價値は稀少性價値である」とした後、交換比率規定の要因たる「財貨の客觀的數量關係」自體が「慾望」(生產喚起) に依存し、此の慾望は又「交換比率」に依存するという循環から脫する方法を求める。卽ち此の三者が同時に決定される條件「市場の均衡條件」として、カッセルの方式を示し、これと限界效用の理論との結合の必要を示唆するのである。

以上がアモンの著書の概要であり、リカアドウ解釋の一つの典型と思われる。しかし果して、吾々がリカアドウに學ぶ所はかかるものが中心であろうか。又果してその再建は、リカアドウが言及しつつも重視しなかつた原理を「全體系から分離又は離奪」せしめることによつてなさるべきであろうか。

四　リカアドウの分配論と價値論——合理性恢復の今一つの道

(一) 既述のことから吾々がリカアドウ自身の「修正」について知りうる所は次の如くである。

(1) 財貨の相對價値を規制する二つの因子、卽ち生產に必要な勞働量及び資本の回轉期間に基ずく利潤を認めるに至つたこと。

(2) 「原理」二・三版にあつては、此の後者、資本の回轉期間、を過大視せざることを指摘し、第二章以下にはあまり變更がないこと。

(3) 但し「原理」二・三版の價値論の部分は充分に彼の意圖を展開していないこと。

(4) 一八二二年「農業保護論」では勞働價値說を欠くこと。

(5) 「修正」論は主題から逸れること。

而して(1)から(4)までの事情からして前節の如きリカアドウの「改築」が企てられたのであるが、ともかくもこれらの事情からして、リカアドウは價値論に行き惱んでいたことは明らかである。

しからば(2)の事情は如何に解すべきであるか。リカアドウは維持し得ざる地盤の上に、舊の建物を保存せんとして苦心したのであろうか。アモンの解する如く理論の再建の爲には、全建築の分解が必要であろうか。

(二) 吾々は(5)の事情に注目することから始めよう。(本來の)主題は何であつたか。「原理」の序文を讀めば吾々は「分配を左右する法則を定めることが、政治經濟學の主要課題である」との言葉を見出すのである。此の分配の法則とは、地代は土地の肥沃度の差に基ずく富の移轉であつて富の創造ではないこと及び勞賃と利潤の對抗關係であつて、此の考えは價値論の第一期にあげた一八一四年のマルサスへの手紙から「低穀價論」「原理」各版、「農業保護論」を通じて價値論の變遷に拘らず終始變らず主張されているのである。相對價値の問題は、先に價

値論の第一期のマルサスへの手紙（一八一六年）に示したように、（本稿四頁）マルサスとの間の舊來の問題に關して、それをリカアドウと同じ考え方を辿るように他人の心に示す爲にあつたのである。實に分配論は「原理」の（本來の）主題であり、これは舊來の問題たる穀物論爭の論據としてリカアドウが用いた所であり、此の分配論の裏ずけとして價値の問題が探求されたのである。

（三）だが價値論に關してリカアドウが到達した行き惱みはその分配論をひいては穀物自由輸入論をも蹉跌せしめないのであろうか。私は先ずリカアドウにあつては價値論と分配論とは直接に關係がないことを述べ、次に、リカアドウ價値論の混亂を解くべき他の方向を見て見よう。

先ず、分配關係は如何に捉えられるか。「原理」第一章の終りに近くに、一・二・三版を通じて次の如くのべられている。

「吾々が地代・利潤・勞賃の騰落について判斷する場合には、或る特定の農場の全生產物の、地主・資本家・勞働者の三階級への分割に依る……」「吾々が正しく利潤・地代・勞賃の率に就て判斷することの出來るのは、各階級によつて取得さるる生產物の絕對量分量によるのではなくて、その生產物を取得するのに必要とされる勞働の分量によるのである」（Principlees. P. 41.）

即ち、分配の問題は一國の總生產物が三階級に分割される比率であり、これはそれら生產物に含まれる勞働量によつて計られるのである、之を逆に見るならば、一國の總勞働のどれだけの部分が各々の階級の爲に向けられているからである。勞賃に向けられる部分は即ち必要勞働であり、吾々はここに剩餘價値の問題に展開すべき見解を見るのである。

さて此の關係は如何にして價値と關係なしに知りうるか。リカアドウはマカロックへの手紙で(1)の事情をのべ

た後曰く、

「結局、地代・勞賃・利潤の大問題は、總生產物が地主・資本家および勞働者の間に分割される割合によつて說明されねばなりません。そしてそれは、本質的には價値の敎義には關係のないものです。」

然らば如何にして分配の法則は價値論とは獨立に考え得るか。彼は語をついで曰く、

「地代をとり除くと……資本家と勞働者との分配は遙かに單純な問題になります。勞働者に與えられる勞働の結果の割合が大きければ大きい程、資本家に歸する利潤の率は少であり、そして反對の場合には逆になるでしょう。しかるに此の割合は本質的には勞働者の必需品を生產する便宜にかかつているはずです。」(Letters to Mc Culloch. p. 79. 譯本、一三一—一三二頁)

即ち、分配の問題を耕境の生產事情に見るという單純化が價値論と獨立に分配論を考察することを可能ならしめたのである。此の單純化は勞働者の必需品及び農產物を共に穀物に歸せしめることにより到達され、その結果、生產物の分割の比率が同時に價値の分割を示し、總價値の考察が始めて可能ならしめる諸關係を此所に考察することを可能ならしめたのである。

(四)　かくの如く、リカアドウ價値論の修正は彼の中心問題たる分配論に影響しないのであるが、次に價値論の混亂はマルクスの指摘する如く、[1] 價値と生產價格との混同に由來することを簡單に示しかかる方向への救濟を述べて見よう。

註(1)　剩餘價値學說史、第二卷第一部第一章二、參照

「勞働を以て凡ての價値の根柢なりと論じ、而して勞働の相對的分量を以て(殆ど專ら)諸財貨の相對價値を決定するものと論ずる……」(Principles. p. 15) 此の前半は價値を、後半は交換價値を述べている。而してかつこ內

は第三版に至つて挿入された「修正」であり、從つて修正は單に相對價値に關するものであり、實は價値の生産價格への轉化を意味するのであり、リカアドウでの自然價格は屢々價値の意味に用いられているが此の生産價格に外ならぬ。[1] 卽ち、堀經夫教授の指摘される如く、リカアドウの自然價格は平均利潤の觀念を加味した價格卽ち修正された勞働價値を貨幣で示したものであり、[2] 「修正」の動機は利潤の存在を認めたことにあつたのではなく平均利潤率の存在を認めたことにあるのである。[3]

註(1) リカアドウは價値を自然價格と屢々混同したが、前者を「眞實價値」「絕對價値」後者を「相對價値」「比較價値」などと呼んで區別して居り且つ勞働を以て價値の源泉となす考えは「原理」の至る所に見られるが、今「修正」を重んじた時期のマルサスへの手紙（一八二一年九月）に之を示して見よう。曰く「我々の注意を向けるべき重大な研究は、穀物・勞働及び諸財貨の騰落、換言すれば、穀物を栽培し、財貨を製造するに必要な勞働量の增減であります。」Letters to Malthus. p. 198. 譯本、下、一四三頁）

(2) 堀經夫「リカアドウの價値論及びその批判史」五九—六〇頁參照

(3) 同六二頁。又ここにアモンがリカアドウの修正は說明すべき利潤を前提した循環論であるとの批評が當らざることが示されている。

かくてリカアドウに於ける價値論の混亂の中から絕對價値＝價値及び相對價値＝生産價格を區別し、前述の剩餘價値（リカアドウが認めたのは相對的剩餘價値に對應する部分のみ）を見出すならば一貫した理論が樹立されるのであり、彼自身も時に認めんとした生産費說への移行の要はないのである。この見地が生産費說に優る所以は、平均利潤の大いさは總剩餘價値の資本量に比例しての分割によつて始めて具體的な大いさとなるということと共に、

價値形態論への發展を期し得るからである。

以上論じた所からして、アモンの改築は少くとも唯一の方向ではないことが示され、且リカアドウの價値論と分配論の關係を兩者を共に交換價値として混同し、これを以て理論經濟學の中心問題であるとした點でリカアドウの姿を全く誤つていることが明らかとなつたと思う。次に私はかかる解決からは見出され得ない所のリカアドウの經濟理論の性格と意味を問うことにする。先ず私は、彼の理論は如何なることを問題にしたかを見、次にそれが持つ實踐的な意味を描き出そうと思う。

五　リカアウド理論と抽象—抽象の次元

(一)　リカアドウの思考的態度は次の二つのマルサスへの手紙に示される。

「私が餘りに理論的に失するとすれば、貴下は又あまりに實際的だと思います。經濟學には非常に多數の組合せがあり、また作用している原因も非常に數多くありますから、變更を生ぜしめたすべての原因を發見してその效果を適當に評價したという自信がつかない限り、ある特定の學說を支持する爲に經驗に訴えるということには大きな危險が存するものです。」(Letters to Malthus. p. 96. 譯本、上、一八二頁)

「貴下(マルサス)がいつも特定の變化の直接且つ一時的の結果を考えていらつしやるのに對して、私はかかる直接的且つ一時的の結果を全く差しおいて、專らそれから生ずる永久的の事態に注意をむけています。」(Ibid. p. 127. 譯本、下、一〇頁)

卽ち彼の思考態度の特質は抽象的方法であり、それはある「永久的な事態」に注意を向ける爲であつた。此の「永久的な事態」とは果して何であろうか。私はこれを「自然秩序」と名付けるべきものと思うのであり、以下

二節にわたつて之を論じよう。

(二) リカアドウは價値論において既述の如く、價値と交換價値を區別したが、大部分は後者、相對價値の問題を扱つた。而して第四章「自然價格と市場價格」に述べられた所から彼が扱う相對價値は自然價格に當ることを知るのである。曰く、

「吾々はこれら偶然的原因とは全く無關係な諸結果たる自然價格、自然勞賃及び自然利潤を左右する法則を取扱う間は、これらの偶然的原因を全く考慮外におくであろう。」(Principles. p. 69)

アモンは此の兩者の差異を否定することから始めたが、吾々は之を重視することから始めよう。リカアドウの市場價格は需要の變動の結果生ずる偶然的一時的な偏倚である。この際、偏倚の意味は利潤率の不均等にあることを見れば市場價格の不安定性は明らかであろう。自然價格とは最大の利潤を得んとする各個別資本の競爭の結果として平均利潤の成立と共に定まるべき價格である。

かくて此の第一次的且つ自然的な(primary and natural) 價格は、その成立の背後に、利潤獲得をめざす各個別資本の自己增殖慾を生產の動機とする制度、卽ち資本制的な生產諸條件を前提としていることが指摘される。自然價格にあつては、かかる競爭が行きつくして平均利潤が成立して居り、從つて自然價格は生產諸條件そのものの意味が示されるべき價格である。

(三) この生產諸條件の意味は、自然價格乃至價値(全生產物に關しては同一視得る分配を左右する)を通じて行われる「總生產物(whole produce)の分配」への視野の擴大によつて一層明らかとなる。

リカアドウが問題にしたのは、總生產物の三階級への分配の比率の變化に關している。先ず、此の比率は前節

(三)で見た如くに總勞働の分割かくて總價値の分割として考えられたが、これは總自然價格は同時に總價値への視點を可能ならしめることによつて知られるのである。從つてかかる分配の比率は市場價格を捨象して自然價格を注目することによつて導かれる。

次にリカアドゥにあつては分配の比率の變化が問題であつた。しからば如何なる意味の變化であつたか。此の分配の成立地盤は「富の增進」(progress of wealth)として捉えられ、「原理」の課題は、この基盤の上での分配の「自然のなりゆき」(natural course)であつた。ここに生産諸條件そのものの歸趨が語られるのである。從來リカアドゥは「分配」の問題を扱つたことは指摘されたが「富の增進」の下におけるその「自然のなりゆき」に注目することによつて彼の論理構造は明らかにされる。

即ちリカアドゥは原理序文に曰く

「分配を左右する諸々の法則を定めるのが經濟學に於ける主要なる課題である。斯學はテュルゴー、ステウアート、スミス、セイ、シスモンディ及び他の人々の論著によつて大いに進歩せしめられ來つたとはいえ、彼等は地代・利潤及び勞賃の自然のなりゆき(natural course)に關しては極めて不滿足な知識しか與えていない。」

「地代に關する知識を缺くならば、富の增進が利潤及び勞賃に及ぼす結果を理解することは不可能である。」

かくて先ず彼が富の增進の下での分配の自然的な結果を如何に捉えたかを、彼をして語らしめよう。

「地代と勞賃は富及び人口の增進と共に騰貴する傾向がある。」(Principles. pp. 78.)

「利潤の自然的な傾向は下落に向う」(Ibid. p. 98.)

次に、上の序文からの引用の後者、分配にあつても就中、富の增進が利潤及び勞賃に及ぼす結果が重要である

との指摘、に目を向けよう。此の結果は今の引用から利潤率の傾向的低下であることが知られるが、リカァドウは穀物條例に關する最初の書物に題して「低い穀物價格が利潤に及ぼす影響」といつたが、正に同樣の問題意識を示して居り、次節の實踐的課題えの展開を導くものである。

更に、リカァドウは此の「低穀物價論」において、先ずかかる分配の自然的な傾向を示して後、「これは蓄積の結果に關する極めて興味ある觀察であり、且つ思うに今まで注意されたことのないものである。」(Essays. p. 231. 譯本、二四頁)と述べていが、リカァドウは資本制的な蓄積を「富の增進」なる言葉で捉えたのであつた。

(四) 以上からして、リカァドウが捉えようとした「永久的な事態」は利潤の極大を目指す各個別資本の背後で、かかる制度そのものから生ずる蓄積の必然的結果であつたことが明らかである。然して分配論が重要であるとの意識は單にそれが未開拓の分野であつたからではない。或る問題を論ずる爲に重要であつたのである。——次節の問題。

ともあれ、市場價格と自然價格との區別はかかる問題の出發點であつた。「自然」とは生產諸條件そのものから發する本質的な問題を意味し、リカァドウの抽象の方向はここに存した。從つてアモンの一般的態度たる自然價格の市場價格への解消は問題の所在を見失つた視點といえよう。

私は彼の論理構造を「自然秩序」と名ずけたが、その一面の意味は、經驗的な現實からの抽象によつて考察されるような、生產諸條件から必然に生ずる結果の理論であることが明らかとなつた。社會の方向づけ(最廣義の政策)との關聯、卽ち、かくして一時的なものを捨象して「永久的な事態」を問題にせしめた實踐的課題との關聯はこの論理構造の他の半面を示すであろう。

六　リカアドウ理論の志向—問題意識

吾々は前節に於てリカアドウの理論の抽象の方向は市場の現象を去つて、「自然秩序」に視點を定めていることにあるのを見た。此の節の課題はかかる視點を定めしめた問題意識に關している。私は、リカアドウが何を以て政策判斷の基準としたかを次々に辿り、究極の規準に達することによつて此の課題を解こうと思う。

(一)　(國際的な分業によつて)「吾々の享樂品が增加されることは、それら享樂品が利潤率の騰貴によつて增加さるることと同樣に、人類の幸福にとつて極めて重要である。[1]」(Principles, p.112.)

「凡ての通商の目的は生產を增加するにあるということ及び生產を增加することによつて、假に部分的損失を招くことがあろうとも一般的幸福を增加するものなることを諸君は知らないのである[2]」(Principles, p. 287)

即ち、「人類の幸福」は「生產の增加」であつた。我々はここにアダム・スミスと同じ言葉を聞くのである。だが「生產の增加」は平穩な道を歩むのではない。スミスにあつては、此の最高の法則は「重商主義」を、「一部製造業者の獨占」を、裁くべき「自然の理」であつた。リカアドウにあつてはこれが分配の問題を媒介として語られるのである。

註(1)　「經濟學論究」第七卷第二號、拙著「アダム・スミスと理神論」參照。

即ち、上述の引用は、穀物自由輸入に際しての地主の地代喪失、農業者の既投下資本の損失を慰撫し、裁決する言葉であつた。從つてリカアドウは云う。かかることは「何らの不利益ではない。土地に費された資本が如何

に大きかろうと。かかる資本は生産物を増大せしめる見地から投下されたのである。」(Principles. p. 256.) 又「農業保護論に於ても同様のことを云う「資本の所有は目的なのか、又は手段なのか……。若し吾々の資本の一部分を犠牲にすることによつて、我々の享樂や幸福に寄與する目的物の年々の生産額を増加せしめるであろうということが證明されるならば、吾々は思うに資本の一部の喪失を歎くべきではない。」(Essays. pp. 293) かくてリカアドウは「特定階級に對する考慮が國の富と人口との増進とを妨げることが許されるということを大いに悲しむ」のである。(Essays. p.252.) これが、地代は富の創造ではなく、又地主は食物が稀少で高價な時に最も繁榮するとの「分配」の事實を强調せしめた所以であつた。

然らば勞働者階級に對して如何。

「人道の友 (friends of humanity) は、總ての國に於て、勞働階級が慰樂品及び享樂品に對して嗜好を持たんことを、及び彼等がこれらの物を獲得せんとする努力において凡ゆる合法的手段によつて奬勵されんことを希望せざるを得ない。」(Principles. p.77.) だが彼は救貧法に關して、それは貧者を富ましめずして富者を貧者にするものである、何故なれば、救貧法は自然的な制限を超えて人口を増加せしめ、富の増進を遲からしめ遂には停滯に趨かしめるから、然して分配の自然過程は利潤と勞賃は相反關係を敎えると云う。かくして曰く、

「他の總ての契約と同じく、勞賃は市場の公平なる且つ自由なる競走に放任せらるべく、決して立法の干渉によつて制御せらるべきではない」(Principles. p. 301.)

「富の増進の自然のなりゆき」はかくして、その過程に利害の反する人々にとつては、忍ぶべき必然性を宣ず、

るものであつた。此の過程を攪亂するものは「自然秩序」の名において排せられたのである。[1]

(二) 吾々は此の「自然秩序」の內容を確かめて見よう。リカアドウは輸出奬勵金、輸入關稅の不便をのべていう、

「それは各財貨間の自然的關係を破壞するのであろう。凡てこれらの不便は恐らく輸入品の價値には影響せず、唯全世界の資本の最良最善の配分を妨げるにすぎぬであろう。」(Principles. p. 153.)

しからば、自然秩序とは「資本の最良最善の配分」を可能ならしむべき體制である。吾々は更に「資本の最良最善の配分」の內容を掘り下げよう。私はこれを、かかる配分のために忍苦を餘儀なくされる二つの階級を再び採り上げることによつて示すことにする。

先ず地主階級を見るに、リカアドウは三十二章「マルサス氏の地代に關する意見」において、穀物輸入の際の總所得價格の下落を考察して曰く

「若しも同じ貨幣額の租稅を納めた後の社會の純所得が以前と同一であつて、而して土地所有者の階級は地代下落の爲に一百萬を損失するとすれば、餘餘の生產的階級は物價の下落にも拘らず、必ず增大せる貨幣所得を有するに相違ない。」(Principles. pp. 415.)

「或は云わん、資本家の所得は增加せぬであろう。地主の地代から控除せられた一百萬は勞働者への追加賃銀に支拂われるであろうと。……」だが議論には何らの變更もあるまい。地主より遙かに最も重要なる勞働者階級が今までより多く得る所のものは「悉く其國の純所得の一部を爲すものであつてその支出は必ず其國の收入、其幸福、若は其勢力を加えずしては已まぬのである。」

次に、地主より重要性を認められた勞働者階級は如何。リカアドウは「原理」第三版に新に「機械論」なる章を加え、機械の使用が勞働者階級の利益に反する場合を認めたが、かかる場合は機械が突然に採用された場合であることをのべ、此の理論が機械を奬勵すべからずとの結論に導かざることを希望し、

「機械の使用は一國家に於て決して安全に阻まれ得ない。何故なれば若し一資本家が、機械の使用が此國で與えられるであろうところの最大の純收入を得ることを許されないならば、そは海外に持ち去らるるであろうから。」(Principles, p.333.)

同樣の事情は、第二十六章「總所得と純所得」において「其の純粹眞實所得卽ち共の地代及び利潤が同一である限り、」個人にとつては何人を雇傭しようと同じであり、又國民の眞實の利益にとつてもその國民が一千萬の住民からなろうと、一千二百萬の住民から或ろうと、それは少しも重要性を持たない。(Principles, p.336.) とのべられている。

かくして「資本の最善最良の配分」の意味は「純所得」或は「純粹眞實所得」の最大なる如き配分であり、後者のうち地代は富の創造ではなく、移轉に外ならず、吾々はここに(相對的)剩餘價値の極大なる如き經濟體制が「自然秩序」の動因であると共にその指向であることを知るのである。

序でに此の體制「自然秩序」が資本家階級に命ずる所は何かを見ておこう。先ず「高い地代と低い利潤とは、もしそれが事物の自然のなりゆきの結果であるならば、決して不平をいうべきことであつてはならない。」(Essaps. p. 235) 次に勞働者階級との關係では「勞働者達をして、夫々生存し且つ彼等の種屬を增減なしに永續することを可能ならしむるに必要な價格」卽ち「自然勞賃」(Principles. p. 70) を與えることであつた。從つて「自然秩序」が資本家階級に要請する所は、利潤極大の欲求がその制度を破壞せざる程度に止まることであつた。

「純所得の獲得」これが「自然秩序」の語る教えである。彼が問題にしたのは個別資本の利潤の問題ではなく、個別資本の利潤獲得競爭の結果生ずる平均利潤が傾向的に低下することであり、「自然秩序」はかかる低下傾向の最大可能の抵抗線でもあつた。

(三) かくして「自然秩序」の論理構造は、前節で見た如く、資本制的生產諸條件そのものから生ずる諸結果の理論であると共にかかる生產諸條件の意圖を最大限に發揮すべきを宣言する裁決の基準でもあつた。これに反するものは「自然秩序」の攪亂 (disturbance) として排せられた。

而して此の「攪亂」(その代表は穀物輸入關稅) が當時のイギリスが過去から受けついだ現實であつて、此の「自然秩序」は將に確立さるべきものであつた。卽ち、今述べた論理構造の二面性からして、抽象の方向は將に存在すべきものへの展望を示しているのである。此の事情は「低穀價論」や「農業保護論」にはそのまま示されているが、「原理」では逆の敍述を辿つて居り、先ず「自然の理」を述べて後、その「攪亂」を批判するのである。

註(1) スミスの論法、殊に「國富論」第三卷から第四卷への論脈を見よ。又リカアドウの穀物論爭に關する此の論理構造については、拙著「リカアドウの原理第七章の分析」參照。(關西學院經濟學論究、第四卷四號)

私は煩雜を覺悟して最後に、この敍述樣式を「原理」の租稅に關する十二章に探つて見よう。租稅は第二次的分配であり攪亂である。卽ち、

「租稅は常に人民の快適と享樂を犧牲にして取得せらるるものであり、又資本を減少せしめるか、蓄積を妨げらるるか、何れかを常とするものである。」(Principles. p. 204.)

又

「租稅は、それが課せらるる國から、技術・產業・風土に伴う諸利益を奪うことによつて貨幣の (國際間で當然あるべき—筆者) 均衡 (これあつて始めて自由貿易の最大の利益が實現される) の亂を惹起する。」(Principles. p. 126.)

かくて「政治經濟學の原理」及び「課稅の原理」とは、「自然秩序」と「その攪亂」を順次論じているとも見ら

れよう。

從つて租稅の原則は、此の「自然秩序」の攪亂を最少にすることであつた。曰く、

「政府は必らず（所得はともかく—筆者）資本の上に落ちる租稅を斷じて賦課せぬようにしなければならぬ。」(Principles, p.134.)

ここに生產の增進の配慮が第一であることが示されているが、次に自然的な資本の配分に如何に留意しているかを示そう。卽ち、

「是等の租稅（財產移轉稅）は國の資本が社會に取つて最も有利となり得るように配分せらるることを妨げる。」(Principles, p. 135)

「これらのものの（輸入關稅・輸出奬勵金）唯一の作用は、資本の一部分をばその自然的には求めざるべき用途に誘致することであり、それは社會の一般基金の有害なる配分を來らしめ、課稅中最惡の種類に屬する。」(Principles, p. 299.)

(四) 最後に本節の始めに引用した「人類の幸福」「人道の友」について今一言のべておこう。マルクスはマルサス「政治經濟學原理」について語つて曰く、

「これはリカアドウに反對して本質的には、產業資本の生產性がそのもとで發展すべき所の產業資本の絕對的慾求と立法と（卽ちリカアドウの自然秩序の指向—筆者）を、土地貴族・マルサスの屬した國教會・政府の役人及び租稅費消者等の利益の爲に『有利』であり且つ『望ましい』ような限界內に（此の限界づけがリカアドウでは攪亂であつた—筆者）押し込めようとする目的を持つた。科學を、それがどんなに誤つているにしたところで、それ自身からでなく、外部からそれと無關係の、外的利益から取り來つた立場に適應せしめんとする人を名づけて私は『劣等』という。もしリカアドウがプロレタリアを機械又は駄獸または商品と同一列に置くとすれば、それは決して彼の劣等なる所以ではない。何故なら彼の立場からすれば『生產』は彼等が機械や駄獸にすぎないことを要求しているからである。……これこそ嚴格であり、客觀的であり、科學的である。彼の科學に對する罪科とならない限り、リカアドウは常に博愛家である。」(K. Marx, Theorien über den Mehrwert. II. I Teil. S. 312. マルチン全集、第九卷三八八頁)

さて富の增進の內部ではリカアドゥの博愛は如何に示されたか。勞働者と地主に對しては、夫々救貧法及び穀物輸入關稅の漸次的撤廢の主張に於て。資本家に對しては如何。リカアドゥは一國の富を增加する二つの方法、即ち (1)所得のより大なる部分の生產への使用、(2)勞働の生產力の向上、の何れを擇ぶべきかを問うて曰く、「後者が擇ばれねばならぬ。何故なら前者に必ず伴う享樂品の欠乏及び減少!を來たさずして同一の結果をあげるから。」(Principles. p. 204.)

七　結　語

リカアドゥの抽象的思考態度は「永久的な事態」に視點を定めるものであり、具體的には「富の增進のもとでの分配の自然のなりゆき」が彼の抽象の次元であつた。その場合「自然」とは資本制生產樣式そのものから生ずるものを意味し、同時にその意圖たる剩餘價値の極大を最大に發揮すべきことを宣する裁決の基準であつた。[1] この論理構造を自然秩序と名づけるならば、リカアドゥ理論の特質はこゝに求められる

註(1)　從つて「自然」とは何等形而上學的なものではないが、リカアドゥ理論は、單なる合理性ではなく一の問題意識の解決の追求の成果を求めて現實に接する時に始めて得られるものであることが考えられよう。私は前にスミスの理論が過度に形而上學的に解せられていることを指摘したが、(前揭「アダム・スミスと理神論」)、逆にリカアドゥは單なる合理性が注目されがちである。

彼にあつては抽象の方向は現實の方向を同時に指示しうるものであり、むしろこの實踐的課題がこの抽象の方向を決しているのである。かくて「自然秩序」の論理構造において理論と政策の一致が見られるのである。私は

先にスミスについて（前掲論文）ポリティカル・エコノミイの獨立の事情を、「生産物量の最大」なる問題意識の成立に見たが、リカアドウに於ては「利潤の極大」が問題意識であつた。兩者は資本制的な生産諸關係を永遠のものと見る點で經濟學のブルジョワ性を共にするが、そこに分配の問題が生ずる所にリカアドウの歴史的な段階があつた。その分配の問題は「分配の正義」ではなかつた。それは利潤の低下の阻止であり、立役者はその段階での「富の增進」の擔い手たる資本家階級であつた。スミスのスローガンは「生産物量の最大」であつた。リカアドウは利潤の、（相對）的剩餘價値の、極大を問うた。個別資本の利潤獲得競走の背後で、生産諸條件は利潤率の傾向的低下の嘆を發した。總資本が最大の純所得を得る如き經濟社會の動向は如何、これがリカアドウの問であり、答は主として穀物自由輸入と救貧法撤廢に現われる産業資本の制覇であつた。

「リカアドウが彼の時代にとつて、資本家的生産方法を生産一般にとつて最も有利なものであると見、富の産出の爲に最も有利な生産あるとしているのは正しい。彼は生産のための生産を欲する。しかもこれを正當〔に〕。もし、リカアドウの感傷的な反對者がしたように、生産はそのものとしては目的ではないと主張しようとするならば、その人は生産のための生産が人類の生産力の發展從つて自己目的としての人類的自然的富の發展以外のなにものでもないということを忘れている。」（K. Marx, ebenda, s, 309. 譯本、二八四頁）

概念體系はその根柢にある歴史的洞察によつて有機的な生命を得る。個々の概念を「分離し剝奪」しての發展・批判は歴史的洞察を同じうするか、若くは概念體系の根柢にある歴史的洞察の批判の上にあつて始めて意義を有する。歴史的洞察を無視する學說史は無意味である。アモンの描くリカアドウは四肢をばらばらにされ、各部分が勝手に撓めゆがめられた畸型兒に外ならぬ。[1] アモンは市場の價格現象を追うことによつて、リカアドウ理論

のディメンションを全く外れてしまつたのである。その根本は問題意識の無視にある。アモンを待つまでもない。ミルは「社會主義論」に於て別の見地から分配を採り上げつつも、經濟學の概念をスミスとリカアドウに借り來つた。かくて「自然秩序」の論理は消滅し、時間は殆ど記號となり、理論は相對性の領域にさまよい、道德は「目的論」(Teleology)の高所から「功利主義」の托宣として絕えず裁決を留保した。ミルが行つたリカアドウ概念の精密化の方向と、社會主義の問題意識の方向との矛盾が、木によつて魚を求めるの空しき模索の觀を抱かしめるのではあるまいか。概念の普遍妥當の崩壞。

ちなみに、リカアドウ自身の價値說の缺陷(價値形態論の缺如)は「抽象力の不足」と稱せられるが、これは單なる抽象力ではなく、抽象の方向を與えた問題意識に、既にその限界が內包されていると解すべきであろう。[1]

註(1)　紙面の都合上行論の途上に指摘したアモンへの批判はここに要約し得ないが、全般にわたつて遠べた心算である。とり殘した一つを簡單に示そう。それは稀少性の範圍であるが、アモンは「無限」を否定して「稀少」としたが、リカアドウのいう無限に增大せしめうる財貨とは、商品生產の對象となる財貨從つて勞働價値の體化せしめらるべき財貨であり、アモンのいう勞働が稀少であることは勿論この考えに含まれている。